田舎荘子

外篇

一冊

田舎荘子外篇巻之四

鵜烏戯論

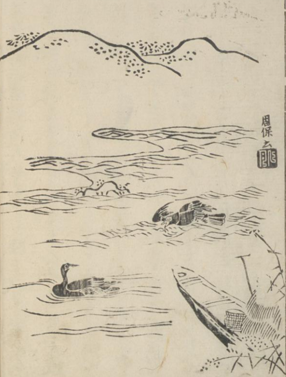
烏艇にとまり鵜が水中に入て魚をとるを紙見ん物しさて鵜ハ魚ハ丸よき物ぞと口的て魚の水中に游泳するを見うけて安逸もなく飛こゑけるに魚ハ泥底に沈んで烏ハいのちからぐして出たり鵜顧て笑て曰世俗の諺に鵜のまねをする烏も水を呑といふ事あれ

はじめて見しより天の物を生じ給ふ意それ〴〵の食ありてそれ〴〵に食を求る才を與へたまふなれば万物餓死する事なし然るに然天ハ人を殺さんとて縁を和に食を好捨る死なれば天のゆるしを背に任せて殺して魚を見る鳥ハ虫に樓ましく身の為とハ違ひ食物にこまらぬ物にして食ひしといふ事多しなかにも草ハ蘭麝香るを似合えぬ悪食

として牛馬の肉までも取くらい鳥の物絞ありがたし人の縁先に干ておく物をも盗まで見てハぬすみ喰ふ鳥ハ人を恐れしそのゆゑに油断もし此巧なるを以て人をも恐れども天のゆるさぬ盗賊をするハ大膽の故なりそれ故にうけて人にも見あくまる、それさへあるに欲ふかくして喰ひ物なきやうに水中ありける魚までをつけ死につまミにする事は

天道にそむく故に天地のにくみにあはれん人となる独り孟子に曰人之養レ心也莫レ善二於寡欲一欲を万苦此よりして禍此根とし人の災苦しむる事多欲より甚しきハなし多欲なる者ハ常に心忙しくして閑静なる事なしたま〳〵其欲する所をとめて快楽とおもふ人ハ又それを求めてやまず欲ハ金銀財宝の欲のミにかぎらず小事といへども求て止まざるを思ふてこれ

さるものハ貪欲なり世間に欲にかゝる事ハなく多く欲にかゝる事ハ常におもしなくね事とおもひて万の器物を愛して巧を極め彼を求め是をのぞむとなりてやまず生涯欲のために使はれて安き心なしあるひハいかり或ハ憂ひ或ハ人を怨む事皆欲より生ずるに試みて知るべし寡欲なる者ハものと求めずとも何ことに随て事足りぬ富貴なれど



人を恵ミ貧賤なれども己が安きを恨むることもなくいつまでも少く生涯無事にして静なり老子曰知足者常富と身は貧賤に居るといへども心は王公の富貴よりも泰なり聖賢の至言信ずるにこれ学問知識を待たず試みに心に試みて知りやすきことなり諺にも凡人は欲を以て心の主とし故に義を不養此無へもなく此欲をも不足節を以て楽とと

して鵜は魚をよくのむまねとおもへば烏鵜
附して才能なしに頭を挙てよく鵜は
やろうに不相応至極とされに謗て世間てもこんの
上は上に立ツ人の目を晴ましおとしかぬる
私欲をもはらとおもはぬを見すて不知ぬる男
さてはからき事ぞとかたりておかしくおかしれ
私欲をもして見付出さるも大きにかめにまねる烏
をこそ鵜のまねをする烏水鳥のむしといふ

されども鵜がいるよふて烏がまね杯を
して水をのむさへ世間に鵜といふもの多く
は烏も水はのむ物とするひとしらく
こびざりぬ世間の人情大かたかくれなし
とのまねの非を知る者もなし

鵯鶴知愚

杜鵑鵯鷹に混て日沙の錦に鴨とみるふ

何の苦労もなく悠々として翩翩我ハ心に叶ふまゝありて終夜寝られざる故に我を罵て叫びありく。奇人ハ我を賞翫して神魂を訪。詩人ハ我を嘲哢して蜀帝の魂なりとも啼。我が心にかなふにもあらじ。汝ハいかなる修行ありてかくのごとくあそび楽しむや。鶴が曰、我何の修行をかさねむ。天の物を生ずるや、山に産ものハおのづから山に食あり、水に生ずる者ハ水に食ありて其

食を喰ひ其所に居て其生を遂るところを楽しむのミ。天萬物を労しむるがために物をせざらむや。其労しむものハみづから労しむるのミ。我又爪を利つも私心を害ることなく、造化の中にあそびて天のまゝに任するのミ。私に楽むにハあらず。我又何の心かあらんや。汝ハ来りて寝られざるを悪とおもひて叫ありく。ものハ是を知り汝が短慮にしてさしても

なき事といひつのり終(つい)に口論(こうろん)に及(およ)て人に
疵(きず)を付(つけ)今行(ゆき)さわりて後悔(こうくわい)をなすと見えたり
常(つね)りのよく慎(つゝしみ)ても申じき事あらバせぬがよし
既に過(あやま)りて後(のち)ハ改(わざ)めて補(とゞむる)ハるく事あらバ
補(とゞめ)べし改(わざ)めてもなきや補(とゞむる)ハれぬ事なりハ
我(わ)の禍(まざ)にあひしをべきやうなし死(し)を決(けつ)し
てすでに怨(ゑん)ぢ終日(ひねもす)終夜(よもすがら)叫(さけび)ありきあるりとてこそ
只(たゞ)ゐてつゐんの飯(いゐ)事を有まじに熱(ねつ)して

あやまちを悔(くゆ)るハ本心(ほんしん)にかへりてよき事なれど之を悔改(くわいかい)て後(のち)かつてなすまじくり返しなよくと[illegible]よこゝろ時ハ我が心体(しんたい)を繋縛(けいばく)して其(その)明(めい)をそこなふものなり一たび過(あやまち)を改めてのち此ふたゝび悪念におこらざるやうにすべくハ我が心におゐてきびしくいましむべし昔日(きのふ)此悪(あく)を人知て其折(そのをり)にも是を唱(とな)へたとひ今此過の度とも今日(けふ)の我におゐて何の傷(いたむ)こゝろかあらん

死に及(およ)ぶとも思とゞまりするなれ是をおもひ深(ふか)く慎(つゝし)むべきハ改(あらた)めざるも多し今の人ハ過(あやまち)を悔(くゆ)る事を知れども是を改(あらた)めて後(のち)あるを慎(つゝし)むことを知らざるに依て悔る事なしとて胸(むね)をいたましめくるしむ事を煩(わづらひ)もおもひやりて胸苦(むなぐる)しき病(やまひ)をおこすといふのことなれどもそのほどすぎぬれハ流(なが)れもあへず忘れ又もとのこゝろになりて後日(ごにち)を慎(つゝし)むことを知らず仏家(ぶつけ)にも懺悔(さんげ)といふ事あり

六祖の壇経にも具に演ぜりあやまちを懺悔して仏祖の前に誓ひ今まで心中に蓄る所の悪念妄想をかくしとゞめずことごとく吐出して過を改め今より罰の[illegible]ありて後悔し慎むの心し今は仏者は志ろしに此前の悪事を白状さへすれば懺悔に罪を滅すといふごとく懺悔はするもなほを慎むもの一唐の寺ねは出家衆もさびつゝし大抵子分遠ひと存候

十王前守居明状　狂言

娑婆世界震旦国唐の憲宗の時韓退之といふ儒者こいぞさまや者あり仏骨の表を書て憲宗の咎めにあひ潮州へ流されて終に配所に窮死せり死ぬるの日風雨烈しく独り三途川のほとりに便船を待て居る所へ大木のかげよりおそろしき姥出て喝してころも裸にせよと引めく退之是をつゝ禄て

いろ〳〵のことありけれ我ハそれ〳〵なれど此悪人(あくにん)なれど仁義(じんぎ)の道を学(まなび)て人ますとむかし潮州(ちやうしう)に左(さ)し時ハ鰐(わに)といふ悪魚(あくぎよ)ありて人を殺し候よし我(われ)祭(さい)文を書(かき)て水中に投(なげ)しかば鰐も感心(かんしん)して其後(そのゝち)ハ人をもそこなハず在所(さいしよ)の人を救(すくひ)しなり其地獄(ぢごく)の外(ほか)をしらぬ文盲(もんまう)野鄙(やひ)の閻魔王(ゑんまわう)を、うやまうにも云(いひ)なして極楽(ごくらく)へゆきたらバ上てれに珍菓(ちんくわ)を調(とゝの)へかへるにおよびまいらせし何とぞ舟(ふね)の鉾(さかほこ)をおさむといへて爐辺頭(ろへんづ)て寂(じやく)かへてそれより備前徳利(びぜんどくり)よりちやうしんを添(そへ)てお極楽(ごくらく)より湯(てう)しまいらせぬうし下飲(のん)て行しされバ退之(たいし)ことより大なる酒も八森ようぬ急(きう)ありとてふうけくまうけしをひ利(り)ちやうんをあげ出し三線(みせ)の箏(こと)となりひ出(いだ)して

三川のめバ濁くわけるぞかしちやらん
されどおもふれのむとおもりじ
閻王へおもへバいかやうの地獄をもまぬかれて
なのといふ媼の口いやお釈迦様のいひつけ
こそいへそ地ごくをも極楽となし給ふ金も
なへといふ遊女がをおとして仕ハ此所ま
二三百も進納して尤りにわくれし候ふ
といふ媼の因縁ハなこつハ浄清ならぬことも

年よりとされども世の中ぞりあれバ一夜の
宿をもかさぬといふ遊女さても性のうらき
おぼへけるとて江口の君をおもひ出して

世の中をいとふまでこそかたからめ
かりのやどりをおしむ君かな

媼返哥

世をいとふ人としきけハかりの宿に
心とむなとおもふばかりぞ

さみらハ酒もくれざりされバ退之凋くみて
わくざくむ古世の身のおもひ出なり
今一盃ものむよしもがな
嘘よ〳〵しき機嫌よりそし伊勢物語をおもひ出し
小まめ〳〵紙十つ十はかきぬとも
かくかうしてにすらん物は
退之の今ハ恨み心まて
浅茅酒飲のとしても吝如し

樽のおだくと和ことゝ川へま
それより無ほまおのんそさぐらの北大河
安紙とも酒乃腸ひあてハ河原か流かうく
申おかし次中らく岸たつく色うて記沢
まはくこきおとされ團紙まうく廣沢比
御寿紙おもひ出して
ころにとも色を投うをにかる
親も知ばえぬ三途川一赤郎

翁よりけりたなごゝろの仰ふとこればゞ死出の山と地獄のまするれハふでん葉淨能雲から電志つくれハなり新羅人七着一人もじめより固執してとゞまりしか退之が俗およひ奇効ハうけのりなびける韓退之まそ陣しまはりの我娑婆にいりし時ハ文古れこれどもあしみ文字をもおしるあしくし人の世情をきさて業しる男と歌ふ世を

去りて後ハ偏舎のへ趣り入さしにもかく泣にハ妻子らをして中に肖像の絵を懸中に念仏とゝ申しそれも過ては帷子一枚にて寒さますとおくかゝる世中もとき境界ハ悲しれ紀まじらぬ娑婆にてそれわつかいし事にるれど此山乃飛泉雲下よいるこしかしこそやさ至り出して

三途川上水流清　死出山頭雷霆轟

自是無怨塵世事　黄泉過客一身軽

退之見て新作面白く作り給れしと是を此文字をましへけるとぞ此中に有事にて鬼神を感せしむる事ハあまたありけれむかし衛山に遠路をし時山中にふりけるに於て雨ふり給も光をみざりしに一盃飲て詩を作り神に慶しけれハ忽に雲くれ雨やみぬ此等の事ハ我か好める所とし雷を

やめて見せむけりなるらし諸ハめぐらしから
をとりて蔦蘿の古寺と引立して

死出の山本のおもに見ゆるいかつきハ
鬼とゝとれうけ火ハかしてそ見れ
炎神細史しかひえん色て晴天をくらぬ
鬟よ辻かしおりし獅子六識そしらぬつふ
死出の山路ひらむ崎より見をつかせハ阿鼻
等活叫喚焦熱などの八大地獄目の下なり

牛頭馬頭の鬼どもをとりまく、か誘れし罪人
とらへこ罪作とゝをとられいて泣き
まし。是や鬼窟裏の活計と古徳もいひ
是も此所なりといふ峯の下より鬼
どもを退之と見とがめて獄もしくと坂中まうく
おどり出、仏法そしりし大悪人いてからりんと
とびかゝる。退之大音あげて五百生前汝ハ鬼
誰そと云。それハ答曰鬼なりし。退之又いはく

鬼子に仏性ありや又無やと鬼ともおし釈職されし不成退之のびわりて八角なる磨盤空裏に走ることく天も動くごとくおいびきれバ鬼とも何事にも会点せざるとりわけめぐる法輪に入言し為て進退のぬそれよりありて六道の岐に迷ふ路の傍まうけてし給ふ僧に錫杖をつき建立して居のに退之逝くなりて見ハ六道能化の大菩にて御しまさぬと此ハ地蔵菩薩こそあしりと善人なるハ退之御しハ見そへふうるなり度事にかり極重悪人無他方便唯称弥陀得生極楽といふところハ西ともまで行る欲地蔵の因善に是如来の本願なり佛に妄語なし決定し信ずべしとのことへハ退之とひなりて曰

不思善不思悪正當恁麼時那箇是弥

陀如来本有浄土
地蔵掉頭と遠て西ふむかふ　退之曰
本来無東西何處有南北
地蔵菩薩とくしれものとし錫杖おつれると
十方諸佛去任衆之所往
仏の慈悲不到といふ事なし經に曰
今此三界皆是我有其中衆生悉是
吾子　此名作不及のこと

退之か曰何の乾屎橛我が父母にいつ須我
もしむかしも生じまゝ今又むかふ梅せんのそ
地蔵菩薩と志かめて同是却是の跡見
なり道ハ有無にまよふ人は是非真妄我
執ニて始もなく終りもなし湛寂羅孔
子も此迹にまよふこといさゝさ天地の間に飛て
五趣の往来となり人は乾坤の外に國
是を極楽世界といふ生もなく死もなし

無れあらじと無量寿佛といふ心をおこして此国に生まれん事を願ふべし然らば八無間地獄に堕せんのを退之言下に一首

志にもさだ是非ともおもはぬものハ
あほう世界に下され長いさ

地荒田地の持病又發り唯塵労妄想を去て生死流転の業をまぬかれ本有此仏土に帰て寂滅無為の楽ゝと志れかし

といふ事し経に曰
諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅
為楽
此文をよくよく工夫せバ涅槃此岸に到るべし
退之意つくづく思案して曰
諸行無常は是生めつの界なるハ
寂滅為楽とこへゆく中ら
地蔵菩薩合掌して

されバこそ滅法界に到りゆけば
諸行無常の里と出なん
一心不乱南無阿弥陀仏し
退之頭を挿て曰仏の説るればくりしく
業因しあへとして
其も親従ころむく縁の楽るれハ
久成し　をかへりたまへや
地蔵菩薩曰

浅(あさ)ましとみえしハ行し法(のり)の道(みち)

名あらくはあさましくそなる

逗之(とうし)とりあへず又

とてもかく濁りましても世の人のなれバ

茶(ちや)屋も湯屋もとこふる者ら

地(ぢ)蔵(ざう)𦬇(ぼさつ)

味(あぢ)もなく甘茶の道(みち)なるまでは

ちや屋と湯やをたてゝなるまん

退之(たいし)とりかへして

くもといふ名ハそなから味(あぢ)もなく

唯(ただ)へいりにハ餓(が)鬼(き)となりてゆき

地(ぢ)蔵(ざう)を今ハもてあつかひのひてまゝハ佛なれ慈(じ)悲(ひ)なれバこそ西仏ともいとまなき辻(つぢ)に立(たち)して無(む)縁(えん)の衆(しゆ)生(じやう)を済(さい)度(ど)されし地蔵なれバをこころなるづれハ猿(さる)と立ていふことあつて他(まんち)が中しおの閻(えん)提(だい)の業(ごう)界(かい)その摩(ま)訶(か)たそなる

にハかなはぬぞとて錫杖をつきかけ辻堂の内に入扉をさして呼どもたゝけども出ざりけれバ退之もちからなく四菩のかんたんを失ひ地ごくへ行事もあらん極楽へハ往とかし六道のつじにおし此室地有しを見すてゝ倒をし前命を付らかくよし冥官どもを告きかせるふよりてかれ此こと〳〵し

右八十五此篇を語日物に見しとぞん年類もの唐人写して見行も清人書寫ありし又一説にハ弘法大師地獄に和人あつて見よせのふとも十分

田舎荘子外篇巻之四終